

明治期における英国のレトリックの受容 (VI)

——高良二『泰西論弁学要訣』の原本について——

有 沢 俊 太 郎

要 旨

高良二は、彼の訳述書の序に、原本は1819年の刊行であると述べている。しかし、この本は、簡単な質問だけから成っているもので、原本とはなり得ない。彼はブレアの“Lectures on Rhetoric and Belles Lettres” (1783 or 1818) を入手し、その第27講を訳述した。

この部分の表現と訳述書のそれを比較すると、「事理」が訳述者の理解の程度に深くかかわっていた。この語は、キーワードとして、文体の部分の訳述に有効に機能したが、創構の部では、そうではなかった。

訳述書には、深刻な歪みをもっている語や文がかなりあるが、それらと無関係に、明確に訳出されるものも見られる。1819年版の質問集は、これらの語や文を書くために、高良二の助けになったのかもしれない。

KEY WORDS

text	原本	jiri	事理
retold version	訳述書	H. Blair	H.ブレア

1. 課 題

本稿は、明治13年5月に大阪尚書堂から出版刊行された『泰西論弁学要訣』の原本につき、新しい資料を得ることができたので、それに基づいてこの訳述書の性格を再検討しようとしたものである。筆者は、昭和55年3月、「明治期における英国のレトリックの受容 (I)」¹⁾として、この訳述書の性格について考えたことがあるが、当時、原本を特定することができず、アメリカ、フィラデルフィア版の流布本を用いることになった。

訳述書には、「序」に、

原書は一千八百十九年ノ刊行ニ係リ頗ル古本ニシテ今日我邦日新ノ世界ニハ不適當ナルカ如シト雖トモ……²⁾ (一丁)

と明記されている。しかし、当時はこの書物の書名と所在を知ることができただけであった³⁾。それが、以後、調査の機会に恵まれて、この二冊を含む四種類の書物の本文を比べ、訳述書の原本としての可能性について考えることができた。

四種類の書物とは、ブレア (H. Blair) 又は彼をめぐる人々の手による、

1. Lectures on Rhetoric and Belles Lettres, A New edition vol. 1~3, London, 1818 (広

島大学蔵本)

2. Essays on Rhetoric Abridged chiefly from Dr. Blair's Lectures on That Science, London, 1810 (大英博物館蔵本)

3. Questions adapted to Blair's Rhetoric Abridged. By an experienced teacher of youth, Northampton, 1819 (大英博物館蔵本)

4. Lectures on Rhetoric Abridged with Questions, Philadelphia, 1871 (国立国会図書館蔵本)

である。テキスト1は、1783年初版本⁴⁾の新装版。しかし、本文の違いはほとんどないと推定される。2, 4は、テキスト1に基づき、イギリスとアメリカで抄述された簡約版⁵⁾。4は前稿執筆の際、用いたもので、明治8年に文部省がこれを購入している。抄述された本文の脚に、質問も付されている。訳述書の「一千八百一十九年ノ原書」とは、テキスト3である。これは質問だけを独立させ、問題集に編み直したもので本文はない。また、質問の内容や配列は、例えばテキスト4のそれと同一ではなく再編成されている。

これらの諸本を吟味した結果、次の三点が明らかになった。

①訳述書の記述に従えば原本はテキスト3に決定するが、この本だけで訳述書は書けない。

②訳述書は、テキスト1に拠って書かれている。構成は正確に対応する。流布本で対応させることは不可能である。

③しかし、テキスト3を初め、2, 4は、訳述文を周辺から支えているという可能性は残されている。

つまり、テキスト3が単独で原本となることはありえない。本文のない、簡潔を旨とした質問集をいくら読んでみたところで訳述文は生まれない。

例えば、

天然自然ハ万事ヲ処置スルノ大法ニシテ演説ニ在テモ亦、此自然ノ法則に遵ハサルヲ得ス
巴カ天賦ノ才能ニ応セサル演説風ヲ強ヒテ企望スルニ及ハス (三十二丁)

は、どうしても、原文

The great rule is, to follow nature: never to attempt a strain of eloquence
which is not seconded by our own genius. (P. 223)

を必要とし⁶⁾、問いの、

・What is the best rule by which to attain excellence in the higher strains of oratory?(P. 23)

は、本文を持たない限り何の役にも立たないであろう。だから、訳述書の記述は誤りである。

しかし、だからといって、テキスト3を初め2, 4などの簡約版が訳述文の形成に全くかかわりを持たなかったと断定することも軽率の誇りを免れないであろう。この場合でも、本文の理解を補い、深めるために質問に答えてみることは十分考えられるからである。とりわけ、本文の内容が難解に過ぎたり、抽象的だったりした場合、このような質問は恰好の注釈となる。訳述者は、問いに答えながら、再び本文に戻り、あるいは関連する箇所へ読み広げ、理解力を磨くことができよう。

そこで、以下では、まず原本(テキスト1)と訳述書の構成、表現などを比較しながら受容の様相を示し、次に、1819年本(テキスト3)を中心に、仮説③を考えてみることにする。

この訳述書が刊行された明治初期には、次のような修辞学書があった⁷⁾。

明治12年 チェンバー著、菊池大麓訳『修辞及華文』

- 12年 尾崎行雄訳述『公開演説法』
- 13年 ブレキル著, 高良二訳述『泰西論弁学要訣』
- 14年 ロートン著, 西村玄道訳述『西洋討論軌範』
- 15年 ベル著, 富岡政矩訳述『弁士必読演説学』
- 16年 久松義典編訳『泰西弁談典型』

明治初期の修辞学は、百科全書の一冊『修辞及華文』を除いてみな弁論の学であった。それらは口語文を鍛えることに直接の影響を与えただけでなく、後の修辞学すべてに通じる原型を素朴ながら備えていた。西洋の書物は、原型をつくり上げるための貴重な材源であり、翻訳訳述編訳は、訳者の興味と関心によって様々な形態を示している。高良二の訳述書も、その例に洩れなかったのである。

2. 原本の訳述の様相

2.1 構成

原本は全三巻47講から成る大部なものである。訳述されたのは、その中の第27講（第二巻、PP.212～245）で、public speaking に関する箇所である。内容的には、Different Kind of Public Speaking—Eloquence of Popular Assemblies—Extracts from Demothenes の三つに分けられている。序論本論（理論篇）と模範例話（実践篇）から成り、他の修辞学書にも類例が多い。

このような構成を訳述書も忠実に受け入れ再現している。ただし、少し詳しく五つにわけて目次を作成しているので、表1に示しておく。

表1 原本と訳述書の構成

	原 本	訳述書の目次
序論	Different kind of Public Speaking (pp. 212~213)	一、論弁学ノ区別ニ古今異同アル事（1～3丁） 一、公会演説法、裁判訴弁法、寺院説経法ヲ以テ論弁学ノ三種ト為ス（3～6丁）
本論	Eloquence of Popular Assemblies (pp. 213~230)	一、三種ノ中ニ就テ先ツ第一公会議事ニ適用スル弁学ヲ茲ニ示ス（6～7丁） 一、公会演説ノ諸要訣如何（7～51丁）
模範例話	Extracts from Demothenes (pp. 230~245)	一、希臘ノ演説大家「デモスセニース」ノ模例ヲ引用スル事（51～89丁）

表1のうち中心をなす部分は、訳述書の題名にも採られている「公会演説法ノ諸要訣如何」で、ここに四つの要訣が順次述べられ、終わりに要約される。私に作成した、この部分の目次は、表2の通りである。

四つの要訣は、要訣3を除いて、更に小項目（ア、イ、ウ、エ、……）に分けて説明されている。原書では一行分の空きが、訳述書では段（改行）が小項目を作成し、この数は正確に一致する。

この部分の文章の構成はいわゆる頭括型に近い。末尾に要旨があっても、ほとんど、1～4の要訣で言い尽くされている。とりわけ、要訣1はPrinciplesの訳述なので、創構、順序、語格にまで影響をおよぼす。したがって、原文と訳述文の比較考察も、要訣1から順に行うことにする。訳述には粗密があり、翻訳に近い箇所もあるが、どのように読んでも原文と対応しない文も含まれている。そのような文の分布を表3によって示す。

表2 本 論 の 目 次

原 本		訳 述 書
Eloquence of Popular Assemblies (pp.214～230)	On a manner or character (pp. 213～214)	公会議事の弁学（6～7丁）
	Principles (pp. 214～216)	公会議事の諸要訣 要訣1 原 理（7～14丁） ㊦ 目的と方法 ㊧ 同 上
	Invention (pp. 216～220)	要訣2 創 構（14～24丁） ㊦ 一般的な注意 ㊧ 初心者への注意 ㊨ 宿題演説の是非 ㊩ 準備の仕方
	Disposition (pp. 220～221)	要訣3 順 序（24～27丁）
	Style (pp. 221～229)	要訣4 語 格（28～49丁） ㊦ 論題に合った熱情 ㊧ 自然ということ ㊨ 適度な熱情 ㊩ 聴衆について ㊪ 話し手について ㊫ 語格体裁 ㊬ 蔓延体と簡潔体 ㊭ 音調口気について
	Summary (pp. 229～230)	要 旨（49～51丁）

表3 訳 述 文 の 特 徴

型		要 訣	要 訣 1	要 訣 2	要 訣 3	要 訣 4
原 文 の 無 視				1		
置 き か え	違う内容へ言いかえ		2			1
	同一内容の詳述		2	3	1	2
	同一内容の短い言いかえ			1		
原 文 に 添 加			2	1		1

2.2 原理 (要訣 1) について

次の原文に対する冒頭の訳述文には、この要訣だけでなく、この訳述書全体の性格が明確に現れている。

Its (the eloquence of popular assemblies) object is, or ought always to be persuasion. ...Now, in all attempts to persuade men, we must proceed upon this principle, that it is necessary to convince their understanding. (p. 214)

公会演説法ヲ用フルノ目的ハ常ニ必ス事理ヲ説明シテ聴衆ヲ信服セシムルニ在リ……〈中略〉……抑、他人ヲシテ我説ニ感服セシムルノ要術ハ必ス善ク事物ノ理義ヲ明説シ聴衆ヲシテ之ヲ会得セシムルノ一途アルノミ (七～八丁)

高良二は persuade を「信服」、convince を「会得」と訳出している。更に、そのための方法について、「事理ヲ説明スル」「事物ノ理義ヲ明説シ……」などと、原文から離れ自分の言葉を書き添えている。とりわけ「事理」(「事物ノ理義」)は、この西洋の修辞学の本質をとらえるためのキー・ワードになっているので、訳述書刊行当時の辞書によって意味を調べておく。

明治 6 年 _____ (ヘボン『和英語林集成』二版)

明治19年 Jiri 事理 (Koto no dōri) n The reason of things, the point or principle of anything, the fact of the case (同, 三版)

明治29年 Jiri, 事理, n. The principle, reason, or propriety of things; the facts of the case; the truth of a matter (ブリックリー他『和英大辞典』7版)

明治 6 年の辞書がこの語を見出し語として採っていない理由は明らかではない。しかし、二種類の辞書は、事理が物事(事物)それ自体の原理(dōri, principle)とそれらの論理的関係(reason)の二つの側面を有することを示している。ゆえに、話し手に要請されるのは、物事それ自体の本質(真実)を適切にとらえる眼と、それらを関係づける論理的思考力である。これが「事理ヲ説明」するために必要な力である。

説得(信服、会得)に、論理が必要であることは改めて言うまでもない。しかし、それが力を持つためには、話し手の物事に対する豊かでしっかりした見方に支えられていなければならない。ものの見方とは、認識力や思考力はもちろんのこと、しばしば、情緒や想像力を伴う幅広いものである。ブレアは、これに sensibility あるいは sentiment という言葉⁹⁾をあてている。聴衆の理解を深める(convince their understanding)には、整った論理とともに sensibility も必要だというわけである。聞き手が「どうしても腑に落ちない。」というのは、話し手のものの見方に対する共感が成立していない時である。

ブレアの場合、sensibility (sentiment) と reason が論証部(argument)を形成する。理で押し情に訴えるという古典修辞学⁹⁾以来の型は崩れていない。そして、これを「事理」という語はよく表現するはずであった。しかし、訳述者がこの語に託した意味は著しい偏りがあったと推測される。

例えば、それは、次の二つの訳述文が原文と違う内容に変わっていることによって、間接的ながら知ることができる。

Of whatever rank the hearer be, a speaker is never to presume, that by a frothy and ostentatious harangue, without solid sense and argument, he can either make impression on them, or acquire fame to himself. (P. 215)

実ニ演説者ハ聴人ノ智賢ト愚不肖トヲ問ハス常ニ慎ンテ先ツ其論理ヲ実着ニ開述スルヲ是

レ勉メ決シテ虚浮ノ辞ヲ吐キ無用ノ弁ヲ費ス勿レ決シテ其淡泊無味ノ演説ヲ以テ聴衆ノ心耳ヲ厭サシムル勿レ…… (九丁)

sense とは sensibility (sentiment) を reason で吟味したものである。したがって、この語の扱いを見れば「事理」の意味の広狭を知ることができよう。sensibility の入る余地の有無を知ることができよう。訳述文では、細部において違いはあるが、sense が逆の方向から想像されている。つまり、sense が生かされない演説とはどういうものかが「淡泊無味」という言葉になっているわけである。この語は、訳述者が自分なりに sense をとらえようとした姿勢の現れとも考えられよう。しかしこの姿勢も、この要訣第二項 (イ) の冒頭で、

Let it be ever kept in view, that the foundation of all that can be called eloquence, is good sense, and solid thought. (p.215)

なる一文が、

凡ソ弁論学ノ大体ハ唯、是レ事実ヲ確論スルニ在ルノミ (十一丁)

と訳出されるに及んで明らかに放棄されている。sense は、「事実ヲ確論スル」ことの背後に隠れて全く現れていない。そして、これが、訳述者の「事理」だったといえよう。つまり、この語では、sense の根底にある sensibility (sentiment) を表現することができないのである。

冒頭の要訣 (頭括部) の、しかも各項 (ア・イ) の冒頭文に現れるこのような性格の「事理」は、以後の論旨の展開に計り知れない影響を与えることになる。おそらく、創構 (2・2) は最も深刻な影響を被るであろう。

しかし、一方で、いかに歪みを持っていようとも「事理」という語を訳述者が使ったことで、ブレアの修辞学における創構の重要性が正しく理解されたのであった。創構の内容はこの語によって誤解されると思われるのに、これは奇妙なことである。しかし人を説得するには、巧みな言葉も大切であるが、それだけでは結局目的を達することができない。言葉は魅力ある内容や筋道 (訳述者の「事理」) を伴って初めて力を持つ。この考え方は先の引用文 (九丁) 中にも、「虚浮無用ノ弁」の戒めとなって見えているが、外にも、原文の自在な詳述となって随所に現れる。

They (to be previously masters of business: to be provided with matter and argument) will always give their discourse an air of manliness and strength, which is a powerful instrument of persuasion. (p. 216)

演説者ハ勉メテ議案ノ旨意顛末ヲ自身ニ了解シ事実ヲ推究スルコト尤モ緊要ナルヘシ此ニ至リ其語気始テ肅然トシテ勢力アルカ如ク人ヲシテ信服セシムルヲ獲ルモノナリ (十三丁)

このように敷衍されても原文の内容を踏まえてなされているので訳述の方向がそれになってしまうことはない。創構の中の文体の位置づけがしっかり押さえられ、これが要訣 4 (文体) の訳述に生かされることになるのである。

2.3 創構 (要訣 2) について

創構は言語化する前に必要な材料を整え説得の方法を発見するという古典修辞学以来の領域であるが、語格 (文体) の部の肥大化に伴い、ほとんど領域消滅の危機に頻したのもあった。しかし、この原本・訳述書の場合は、そのような恐れはない。原本は四項あり、訳述書も、要訣 1 を承けているので、忠実に十一丁分を使って訳述されている。

原本では、創構は、演説の準備はいかにあるべきか、という課題に置きかえて述べられている。しかし、このような実際的な課題に沿って述べられても、内容に少しでも踏み込むと、材

料の見方や論証の立て方において訳述書は大きな違いをみせるようになる。

But the premeditation which is of most advantage, in the case which we now consider, is of the subject or argument in general rather than of nice composition in any particular branch of it. With regard to the manner, we cannot be too accurate in our preparation, so as to be fully masters of the business under consideration;... (p.219)

……尤モ此預備トハ先ツ論案ノ総体ヲ思考シ推究スルノ謂ニシテ其枝葉ノ文飾ヲ修ムルニ非ス第一、前以テ題案中ノ事実ヲ徹頭徹尾、精密ニ量定スルヲ要ス (二十一丁)

ブレアは問題 (subject) を詳細に分析したり、論証 (argument) を公式化したりすることに興味を示さない。かといって、一切の手続きを否定するわけでもない。原文の第一文は、創構の段階における分析、公式化の弊害が説かれている。問題の分析は、行きすぎて、カタログのようになってはならず、論証は枝葉末節まで決める必要性はない。それらは全体を見失わず、つまり、大まかに (in general) とらえてさえいれば、表現の段になって人間の理性と感情は自ずと問題にふさわしい言葉を見つけ出す。また、その配列にしても、理性と感情 (sensibility) の相互作用 (taste¹⁰) によって一つの体系へと生成していく。「十分に物事を支配する」(to be fully masters of the business) ことは、それを細部まで吟味することと次元が違うことなのである (第二文)。

訳述文では、このようなブレアの創構観はほとんど消失している。原文の、

・準備については、問題と論証とを大まかにおさえておくこと。(第一文)

・そのためになら、いくら準備に正確さを期しても、過ぎることはない。(第二文)

の論旨は混乱し、第二文の従属句 (so as to ……) が傍点を付して、しかも、誤解されて主文となっている。もっとも、「題案中ノ事実ヲ徹頭徹尾、精密ニ量定スル」のは、訳述者の「事理」の理解からすれば、むしろ当然の訳述であろう。また、事実と常に戻って確認し、実証的に検証をすませた事実どうしを、「思考・推究」して「総体」に結びつけるという訳述文の大意は、明治初期という時代が求めた論理のあり方だったかもしれない。ブレアもこのような帰納的 (経験的) な論理構築にとり立てて異を唱えているわけではない。しかし、引用した原文は、このような論証法も含め、あらゆる他の論証法に共通する創構のあり方である。それは、基本的に、隙間を意図的に残した創構である。人間の感情や想像はこの隙間に息づくのである。それが、堅固な事実関係を軸とした創構論へ矮小化し変容しているところに、sensibility という側面を欠落させた「事理」がもたらした具体的な影響が出ていると思う。

ところで、ブレアが理性と感情の相互作用 (taste) という手続きによる創構論を説くとき、それを「擬似自然主義」とみなすことができる。彼の自然 (nature) には、人間に与えられた本能の表出を制御する方法が理性の機能を通して考えられている。それは、技巧を駆使して作り上げた第二の自然 (技巧に支えられた無技巧) である。この意味で、訳述者の「事理」は確かにブレアの自然の一端を正確にとらえているといえよう。しかし、それは、彼の自然の仕組み全体を見通して使われたわけではなかった。

前稿でも nature に相当する語がかなりの頻度で訳述書に現れることを指摘した。それらは、「自然」「天然自然」「自カラ」である¹²。しかし、これらの語が nature なる原語を持っているかどうか知ることは不可能であった。それが、原本と比較することによって、nature ⇔ 「自然」「天然自然」という安定した訳¹³だけでなく、様々な例があることが判明した。

...he will find it the better method..., for the rest, to set down short notes of the topics,

or principal thoughts upon which he is to insist, in their order, leaving the words to be suggested by the warmth of discourse. (p. 220)

其他ハ乃チ只、論案中ノ主旨ヲ短簡ニ筆記シ善ク前後顛末ノ序ヲ整ノヘ置クアルノミ然リ而シテ其文辭語声ニ至テハ演説中自然ニ胸間ヨリ湧出スルモノナルカ故ニ……（二十三～二十四丁）

But as the debate advances, and parties warm, discourses of this kind become more unsuitable. They want the native air, the appearance of being suggested by the business that is going on; study and ostentation are apt to be visible; and, of course, though applaud as elegant, they are seldom so persuasive as more free and unconstrained discourses. (p.219)

……両党ノ討弁愈ヨ熾シナルニ随ヒ此宿題ノ論説ハ愈ヨ相稱ハサルニ至ルモノナリ其文飾ノ美ハ固ニ美ナレトモ其構思誇張ノ跡ハ蔽ヒ難ク、寧ソ夫ノ機ニ臨ミ変ニ応シ従容自由演述シテ人ヲ感服セシムルニ若カンヤ（二十一丁）

二つの訳述文における nature (自然) の扱い方は対照的である。先の訳述文は「準備の仕方」を内容とするもので、初めに引用吟味したものと同じ頃 (エ) にある。それなのに、ここでは、ブレアの創構の特色が巧みに訳出される。だから、句を語で短く言いかえることができるのである。“..., leaving the words to be suggested by the warmth of discourse” (語格は話の熱気のままに任せる) が、「自然」一語で言い当てられている。

ところが、次の訳述文では、nature の訳語さえ見当たらない。この語を含む文 (They want the native air,...) 全部が無視されている。確かにこの文は前後に挟み込まれた、いわゆる挿入句のような部分であると言える。ブレアは‘free and unconstrained discourse’を説きたいのであり、訳述者も著者の意図に傍点を付して応じた。しかし、「話が自然の外観、つまり、物事が進行しつつあるという外観」をとることは、「機ニ臨ミ変ニ応シ従容自由」であるために必須の条件である。従って、この文は後の部分の伏線であるとも言えよう。

以上のような例に見える nature の訳出の揺れひとつを見ても、訳述書のブレア理解は本質的な領域で確立していたとは言えない。このような結果は、とりわけ、「事理」が nature (taste) に込められたブレア特有の意味を汲みとるための媒体として十分機能しなかったことを示すものであろう。

2.4 語格 (要訣 4) について

「事理」は、創構の場合とは違って、ここでは有効に機能している。前稿で、このことについては指摘したので、それを補足することを試みたい (なお、「順序」(要訣 3) については、前稿と重複する箇所が多いので本稿では触れないことにする)。

ブレアの style 論においては、warmth, passion が重要な語である。これらには、will (訳述書では「意馬」) も含むと思われ、sensibility と同様 sense の根底に存在するものである。warmth, passion (「熱情」) の全く欠けた話は、しばしば表現の必要性さえ問われかねない。しかし、warmth の赴くままに放置すると、style は、‘quaint and artificial’ となり¹⁴⁾、言葉だけが飛び回る。熱気のままに任せると言葉は激しく巧みさを増すが、それだけ、話し手から離れていく。これが論弁学の目的の説得 (信服) にどんな悪影響をもたらすか。訳述書は「事理」によって、これを会得し、あるべき語格の性格から taste や nature という、技法を生み出すブレアの本質的な領域へ踏み込んでいった。

...If, when most heated by the subject, he can be so far master to himself as to preserve close attention to argument, and even to some degree of correct expression, this self-command, this exertion of reason, in the midst of passion, has a wonderful effect both to please and to persuade. (p. 224)

若シ夫レ演説者其論題ノ如何ニ応シ自カラ感激スル所アルヘシト雖トモク其熱情ヲ制御シテ放肆ナラシメス論理ヲ精究シテ且ツ語格ヲ適切ニナストキハ遂ニ以テ聴衆ヲ感悦セシメ又之ヲ信服セシムルニ足リ一挙両全ナルヘシ、即チ一理一情、相ヒ須テ始テ此珍重ナル結果ヲ収ムルヲ得ルナリ (三十五丁)

「一理一情」と訳出したとき、nature や taste がどの程度意識されていたかは不明である。しかし、この語によって、理性や熱情の行き過ぎが正され、補われて nature や taste に近い概念が形成され、様々な良質の訳述文を生み出すことになった。それらの訳述文には、原文に合わせて、各種の否定表現や逆接の接続助詞（接続詞）等が用いられ、一方の過度の行使を戒めている。

ア. As, first, the warmth which we express must be suited to the occasion and the subject... (p. 222)

第一 演説者其熱心ヲ発スルハ必ス時ト場合ニ応シ論議ノ軽度ヲ見テ加減ノ調子ナルヘカラス (三十丁)

イ. ...; we must still set a guard on ourselves, not to allow impetuosity to transport us too far. (p. 223)

……演説者慎シテ過急ニ馳ルコト勿レ (三十三丁)

ウ. ...I know that it is common to recommend a diffuse manner as the most proper. I am inclined, however, to think, that there is danger of erring in this respect;... (p. 228)

……只、要略短句ノミヲ用ヒス宜シク諄々教誨シテ事理ヲ開釈スヘキコトハ余カ言フ俟タサレトモ時ニ或ハ適度ヲ過ルノ患ナキニ非ス (四十六丁)

これだけ自由に語句を補い、正確に訳述しても、それはブレアの nature や taste という理念を踏まえてなされたものではなかった。nature の訳語が揺れ、taste に一度も訳語があてられなかった¹⁵⁾という理由からだけではない。nature や taste は、話し手の立場からは、self をめぐる語によっても説明されうる。ブレアのように言語表現を知・情・意の相互限定作用として考えるなら、話し手はいずれにも偏らないよう自己調整することが必要になる。これは、自己が自己であることをわきまえた者、自己意識に目覚めた者にのみ可能なことであろう。

訳述書においては、この語の訳出は次の如くである¹⁶⁾。

- set a guard on ourselves (p. 223) → 慎シテ (三十三丁)
- command of himself (p. 223) → 自カラ意馬ヲ制御ス (三十三丁)
- self-command (p. 224) → (自カラ……制御ス) (三十五丁)

訳出状況は、taste ほどではないが、創構部における nature の水準に戻っている。思い切り簡略化されたり（「慎シテ」）、特に訳出されなかったり（「自カラ……制御ス」三十五丁）する。これは前後の部分で「一理一情」と述べられ、「過急ニ馳ルコト勿レ」と訳されていることと矛盾する。それゆえに、訳述書の理解の仕方は、逆の方向からなされたことになる。彼は、self とか、taste や nature という抽象的で難解な理念からブレアに入るよりも、もっと身近で具体的な技法、それも語格のあり方から入ることを選んだのである。何が採られ何が捨てられるべき

語格かを考えたとき、必然的に話し手のあり方が視野にとらえられた。そして、ついに、語格の生死を決め、言語表現全体を貫く原理の存在を知ったのである。原理は、明確な像として固定されたとはいえないけれど、具体的な技法追及の結果として現れてきたわけである。

もちろん、訳述者の理解がすべてこの型であったとは言えない。command of himself が「自カラ意馬ヲ制御ス」と訳される場合があるように、抽象的な理念でも何らかの方法で正面からとらえようとした形跡がないわけではない。これについては、次章で改めて考えてみたい。しかし、これまで多くの例を通して述べたような逆方向からの理解がこの訳述の基調をなしていることは確かである。このような理解の型を明治初期における外来文化摂取のひとつの方法として位置づけることも可能であろう。

3. 原本の周辺

3.1 sense の訳出

これまでの原本と訳述書の比較によって、訳述文には様々な歪みが認められるものの、同時に、いくらか例外といえるものがあることも、明らかになった。例えば、創構部における論証や語格の部分における自己意識については、原本の趣旨を汲みとっているために、かえって周囲の文章から浮き上がっている文があった。ここでは、そのような文について考える。

ところで問題の自己意識 (self) や論証 (argument) は、いずれも、nature や taste の基盤にある sense の理解に深く関係する。もし、sense がどこかである程度でも押さえられていたら、nature や taste の輪郭が現れ、これらの概念 (self) や方法 (argument) が導き出されても不思議ではない。さらに、この理解の仕方は、逆方向からではなく、正面からのものであることを暗示する。

sense の訳が現れるのは二箇所ある。

ア. "Good sense is the foundation of Eloquence, as it is all other things that are valuable."
(p. 227)

能弁ノ術タルヤ他ノ万事ニ於ルト一般ニ是レ智恵ヲ以テ本トス (四十三丁)

イ. ..., let every orator remember, that the impression made by fine and artful speaking is momentary; that made by argument and good sense, is solid and lasting. (p. 230)

……文飾巧弁ノ感動ハ止タ瞬時ニ存シ論理靈弁ノ感動ハ永久ヲ保ツト云フ是レ凡演説家常ニ服膺スヘキ要訣ナレ (五十～五十一丁)

sense は 6 回の用例があるが、4 回目までは訳されないに等しい¹⁷⁾。5 回目の四十三丁で突然「智恵」となる。6 回目では「靈弁」となる。これらの訳語は必ずしもブレアの sense にふさわしいとはいえない。が、訳語の適不適はともあれ、訳述書がこの語に注目するようになったことには大きな意義がある。

なぜ訳語が突然現れたか。これを考えるにはこの二つの訳述文の箇所には注意する必要がある。初めの例は、キケロの演説からの引用部分である。しかも、本文の脚に補注として収載されている部分の訳である。また、次の例は、要約部に現れている。つまり、これらの箇所は訳述文の文章の展開から外れている。訳述文では「事理」が冒頭にあり、この概念が以後に注いでいた。しかし、この訳語を含む文は、その支配が全く及ばないか、文章の結尾という最も遠い場

所にある。

ここにひとつの仮説（仮説③）が成立するゆえんがある。この部分は、原本の文脈の外にあるもの、つまり周辺の諸本の影響を受けているのではないか。訳述者は、原本だけでなく、他の諸本も参照したのではないか。仮にこれが事実だったとしたら、どのような手順で利用したのか。次節では、訳述書中に明記されていた1819年本（テキスト3）を中心に考えてみることにする。

3.2 1819年本（テキスト3）の性格と役割

1819年本に収載された質問を *Eloquence of Popular Assemblies*（本論）の目次に沿って整理すると、表4のようになる（pp. 22~23）。

表4 1819年本（テキスト3）の質問（質問番号は私に付したもの）

Contents	Questions (pp. 22~23)
On a manner or character	1. What is the foundation of every species of eloquence? 2. What should be the first study of him, who means to address a popular assembly?
Principles	3. What is the capital rule to render him a persuasive speaker?
Invention	4. Are set speeches approved in public meetings? 5. Dose this forbid premeditation? 6. Of what use are short notes of the substance of a discourse?
Disposition & Style	7. What forms the peculiar character of popular eloquence in its highest perfection? 8. What is the best rule by which to attain excellence in the higher strains of oratory? 9. Is there any danger in this case of being too vehement? 10. On what ideas should an orator adjust the whole train and manner of his speaking? 11. What style is best, the diffuse, or concise?

これらの質問は、原本を読むための親切な手引きである。しかし、中には、答えを出すために他の章へ読み広げる必要性のある問いもある。それが、問2である。この問いに答えるには、読者は、本文のうち、

...; and to have a precise and proper idea and proper idea of the distinguishing character which any kind of public speaking requires, is the foundation of what is called a just taste in that kind of speaking. (p. 214)

の部分を探し出さねばならない。すると、演説をするためにまず勉強すべきことは、「tasteの基盤にあるものについて正確かつ適切な考えを持つことだ」という一応の答えが得られるわけである。

しかし、tasteの基盤にあるものは何かを知ろうとすれば、どうしても、第二講の taste¹⁸⁾に

戻って行かざるを得ない。公会演説の講をいくら丹念に読んでも、tasteの仕組みが系統立てて述べられているわけではないのである。この点、第二講の説明はブレアの修辞学の本質をできる限り明快に述べようとしたものだと言える。しかし、説明の対象が抽象的な概念だけに具体的な技法を取り扱うようなわけにはいかない。読者が第二講へ戻ったとしても理解するのは容易ではない。そこで、再び、問いの存在が生きてくる。理解を助けるためにその部分に付された質問が活用された可能性がある。

1819年本の質問は、1871年本(テキスト4)のそれと比べると、全体的に簡約化されている。しかし、事柄によっては、1817年のものよりもよほど丁寧に問いが作られている例もある。tasteの基盤にあるものについての問いは、まさにその例に当たるのである。

次にその問いを1871年のものと対照させて示し(表5)、本文を添えておく。

表5 tasteをめぐる質問

Text 3 (1819) p. 3	Text 4 (1871) p. 9
<ul style="list-style-type: none"> • Of what is a completely good taste compounded? • How can we be satisfied of this? • How does we judge whether they be properly executed? 	<ul style="list-style-type: none"> • What influence do reason and good sense have upon the operations and decisions of taste?
<ul style="list-style-type: none"> • From what does a great part of our pleasure arise in reading the Aeneid of Virgil? • To what is the discovery owing? 	<ul style="list-style-type: none"> • Illustrate.

But although taste be ultimately founded on sensibility, it must not be considered as instinctive sensibility alone. Reason and good sense, as I before hinted, have so extensive an influence on all the operations and decisions of taste, that a thorough good taste may well be considered as a power compounded of natural sensibility to beauty, and of improved understanding. In order to be satisfied of this, let us observe, that the greater part of the productions of genius are no other than imitations of nature; representations of the characters, actions, or manners of men. The pleasure we receive from such imitations or representations is founded on mere taste; but to judge whether they be properly executed, belongs to the understanding, which compares the copy with the original.

In reading, for instance, such a poem as the Aeneid, a great part of our pleasure arises from the plan or story being well conducted, and all the parts joined together with probability and due connection; from the characters being taken from nature, the sentiments being suited to the characters, and the style to the sentiments. The pleasure which arises from a poem so conducted, is felt or enjoyed by taste as an

internal sense; but the discovery of this conduct in the poem is owing to reason; and the more that reason enables us to discover such propriety in the conduct, the greater will be our pleasure. We are pleased, through our natural sense of beauty. Reason shews us why, and upon what grounds, we are pleased. Whereever, in works of taste, any resemblance to nature is aimed at; whereever there is any reference of parts to a whole, or of means to an end, as there is indeed in almost every writing and discourse; there the understanding must always have a great part to act. (pp. 24~25)

1819年本の問いが詳しくなるのは、第二講ではここだけであるが、関連する三~五講にかけてしばしば見られる。そして、その大半が、この例のような抽象的な語について、その具体例の説明(この場合は詩を読むことの説明)まで質問を作っているのである¹⁹⁾。これは、おそらく、この本が若い人々を教える教師によって編まれたことと関係があるのであろう。

確かに未熟な読者でも、順序よく並べられた問いに答えていけば、tasteをもっとも深奥で支えている sense に到達することができる。

問いの答えは、本文より、

- It is compounded of natural sensibility to beauty and of improved understanding.
- We can be satisfied of this by observing the productions of genius.
- We judge it by the understanding, which compares the copy with the original.
- It arises from the proper conduct of the plan or story. It is felt or enjoyed by taste, as an internal sense.
- It is owing to reason.

となり、sensibility や reason とともに、taste (nature) そのものとも言える 'internal sense' が浮き彫りになってくるわけである。

これが「知恵」や「霊弁」が訳語として現れるまでの過程である。しかし、この推論は理論的には成立するものの、訳述者がこれだけ自由に質問集を使いこなすことができたかどうか、不審な点が多い。質問によって読み広げ、更に読み深めるという二重の操作が実際になされたかどうか、実証するのは難しい。この点につき、明快に判断することはできないが、次のことは指摘しておきたい。

それは、先に引用した taste を含む部分(p. 214)の訳述が次のようになっていることである。

……是ニ於テ人苟モ能弁ノ大家タラント欲セハ須ラク予メ此各種ヲ識別シテ適當ノ調子塩梅ヲ混乱セシムルコト莫レ

訳述は全く原文を離れ、第二講とつながり Principles 以下の要訣を従えるという原文本来の機能を全く果たしていない。それは単なる序文なのである。

訳述者はこの質問集を実際に活用したのかどうか。その活用の可能性は第27講を離れれば離れるほど低くなる。つまり第27講に対応する表4のような問いは、原本による訳述の不備を補い、記述の正誤、適不適を確認するために活用された可能性はある。しかし、そこから第2講に戻り、表5の問いを活用することは、むしろ、逆方向からの理解をより深めるためだったかもしれない。入口は違っても、究極には、sense や taste に到達する。この意味で質問集の果たした役割は副次的である。しかし、それらは、訳述者の観念の中ながら、迎るべき道と出口(正面の入口)を示し、そこへ誘うという重要な役割を果たしたものであろう。

4. ま と め

以上の考察を通して明らかになったことを、箇条書きでまとめておく。

1. 『泰西論弁学要訣』の訳述は、1783年の初版本か、それに相当するテキスト（テキスト1）によって行われた。

2. その際、訳述者の「事理」がキーワードであった。この語は、ブレアの sensibility (sentiment) を含まないものだったので、創構は誤解された。

3. 創構は、この語を通して理解されたために、緩やかさを失い、事実関係の精査に基づく経験的なものに変質した。

4. しかし、語格においては、この語が有効に機能し、訳述者はブレアの修辞学の本質まで理解している。

5. 訳述者が序に明記している1819年本は、これだけが単独で訳述の原本とはならない。しかし、訳述の文章の文脈を外れて時折現れる一部の訳文（訳語）は、この1819年本を初め、周辺のテキスト（テキスト2～4）に負ったものではないかと推測される。

これらのまとめによって、前稿の結論の誤りを正し、空隙を埋めることができた（2, 3, 4）と考える。しかし、テキストについては、複数のものの関与した可能性を否定し切れず、そのまま推論として書き記す結果となった。これは訳述者自身の「筐底＝捜出セル一篇」²⁰⁾という記述と矛盾する。

しかし、この記述がもし事実であったとしても、複数のテキストと訳述書との比較の意義それ自体が失われることはない。「訳述」とは基本的に原著者の「翻訳」と訳述者の「叙述」を未分化のまま含むものであり、それゆえに訳述者の理解は複合的な性格をもつはずだからである。もちろん、訳述のための中心的な資料は考えられよう。それがこの訳述の場合、テキスト1である。しかし、それとて、具体的な場面における多様な情報（テキスト2～4）によって相対化され、絶対性を失うことさえある。逆に副次的であるはずの情報が訳述文のある部分では中心的な役割を演ずる可能性もある。

訳述とは、情報の渦中にある訳述者がそれらを主体的に選択し総合して、一つの文章を形成していく営みである。

注

1) 『富山大学教育学部紀要』(第28号, 昭和55年3月)

2) 引用文は原則として新漢字, 旧仮名遣いとした。略字合字は書きかえた。(以下の引用も同様)。

3) 大英博物館蔵本目録 (British Museum General Catalogue of Printed Books) によると, “Questions adapted……” (テキスト3) だけが1819年刊である。完本の再版等もない。

4) 高知大学付属図書館に所蔵されていることを確認 (未見)。訳述者は「徳島県土族」である。

5) テキスト2と4は本文は同一。問いの有無だけが異なる。

6) 引用の断りのない限りテキスト1から。(以下同様)

7) 『修辞及華文』『弁士必読演説学』については、既に検討した。(『明治期における英国のレト

リックの受容 2～3』富山大学教育学部紀要29, 30)

- 8) 'a certain natural and instinctive sensibility' (p.19, テキスト 1)
- 9) 例えば, アリストテレス『弁論術』の論証部。
- 10) taste は, 表現・理解のための資質を表すブレア独特の言葉である。テキスト 1 においては, 第 2 講から 5 講にかけて詳述されている。
- 11) ロラン・バルトのキケロ修辞学についての評語。ブレアの nature にも通じる。近代的な自然の謂である。(ロラン・バルト『旧修辞学』みすず書房, 1979, pp.30～31)
- 12) 訳述書には36回現れている。原書(テキスト 1)には, 10回。
- 13) 32丁。
- 14) p. 227, テキスト 1。
- 15) taste は 2 回現れるが, 両方とも訳出されない。(五丁, 三十六丁)
- 16) set a guard on ourselves (p. 223), self-command (p.224) については前の引用文を見よ。
- 17) p. 215に 3 回, p226に 1 回現れるが訳出されない(ただし, p. 215の一例は「淡色無味」)。
- 18) 第 1 講は introduction なので, 第 2 講が実質的な冒頭である。
- 19) 外に, sublimity, colour, figure など, taste の源泉となるものについての説明。
- 20) 二丁。

Acceptance of British Rhetoric in the Meiji Era (VI)

—On H. Blair's Text of a Japanese Retold Version—

Shuntaro ARISAWA

ABSTRACT

Ko Ryoji, in the preface of his retold version, declares that Blair's original text was printed in 1819. But this version, made up of brief questions alone, cannot be the text independently. He got the complete version, "Lectures on Rhetoric and Belles Lettres" (1783 or 1818), whose Lecture 27 was retold.

Comparing the expressions in this Lecture with those in Ko's version, "Jiri" was deeply concerned with the degree of his understanding. This word, as a key word, works effective enough for him to retell the part of style, but not the part of the invention.

In this retold version there are a lot of words and sentences with distortion, but, irrespective of them, some are translated clearly. The 1819 version might have been helpful for Ko Ryoji to write these clearly translated ones.